

◆特集 ヘルスサイエンスライブラリーの構築◆

## これからの医学図書館

青 木 仕

### I. はじめに

学術情報の電子化が急速に進み、これからの医学図書館の将来は予測しがたい状況にある。1980年代初頭のアメリカの医科大学では、マセソン・レポートが発表され我が国においてもそのレポートは注目され、その後の医学図書館の指針となった。マセソン・レポートとは、(Nina W. Matheson's) その主任研究者の名前を借りて命名され、IAIMS (Integrated Academic Information Management Systems) 統合型学術情報マネジメント・システムを基盤として、1983年よりNLM (National Library of Medicine) 米国国立医学図書館によりその構築が推進されアメリカ全土に広まった。IAIMSの基本構想は、医科大学に豊富に蓄積されている情報資源、教育資源、コンピュータ資源、図書館の資料などを再構築し、新情報ネットワークをつくるというものである。新情報ネットワークは、コンピュータ・ネットワークによって図書館システム、他の情報システムの統合化を援助し研究、教育、診療に関する組織運営の場での意思決定に役立てることをコンセプトに計画されている。そして、医学図書館の情報サービスの未来へのシナリオとしてStep 1. の5~10年後は、近代的な情報資源図書館、Step 2. の10~20年後は情報マネジメント・センター

機能を持つと予測している。そのシナリオは今日の医学図書館の現状を反映しており、その予測はほぼ的中していた。そして、21世紀には図書館はインテリジェント・センターとして存在するであろうと予測している。21世紀には、図書館員は情報マネージャー、データベース・マネージャー、知識エンジニアとしての役割を持ち、情報の吟味、評価という点で重要な役割を担うであろうと述べている<sup>1)</sup>。今後この予測も的中するであろうか。

その後、1987年には「Challenge to Action : 行動への挑戦」と題したこれからの大学医学図書館活動のガイドラインがアメリカのMLA (Medical Library Association) 医学図書館協会から発表されている。そこには、図書館の親機関である大学とのパートナーシップが重要であると強調されて述べられている<sup>2)</sup>。

このようにアメリカの医学図書館界を追従してきた我が国の医科大学図書館であるが、ドラスティックに変貌する社会や情報メディアの変化と急速な進歩に、我が国独自の医学図書館の未来像に関する提言は見当たらない。そこで、我が国の医学図書館界での現状と現在関心が寄せられている事柄を取り上げ、これからの医学図書館を考えてみたい。

### II. 電子ジャーナルの普及

今日の医学図書館では、1990年代の後半から急速に普及した電子ジャーナルの利用を抜きにして医学情報サービスの提供は図れな

AOKI Manabu

順天堂大学図書館

aokim@med.juntendo.ac.jp

い。2003年度調査では、オンラインで提供されている電子ジャーナルは34,500タイトル、オンラインでの学術雑誌と査読誌を含め14,600タイトルと推定している。2005年度時点で電子ジャーナルのタイトル数主要出版社は、Elsevier 1,800タイトル、Springer 1,060タイトル、Taylor & Francis 950タイトル、Blackwell 600タイトル、Wiley 500タイトルなどが上位を占め、これらの商業出版社は学術雑誌の電子ジャーナル化をリードしている。国内学会誌もJST（科学技術振興機構）のJ-STAGE（科学技術情報発信・流通総合システム）から2004年現在246タイトルが電子ジャーナルとして提供されている<sup>3)</sup>。また、メテオ・メディカルブックセンターからメディカル・オンラインとして日本の商業誌を含めた医学雑誌約300タイトルが提供されている。今後一層、国内外の学術雑誌の電子ジャーナル化は推進されるものと思われる。有用である電子ジャーナルではあるが、課題として、1.購入価格の高騰、2.バックナンバー利用の不透明性、3.図書館員による流動的なURLの維持管理、などがあげられる。

現在購入価格が高騰する電子ジャーナルの打開策として、大学間共同購入によるコンソーシアム契約が実施されている。もう一つの打開策として研究者の投稿料をベースに発行され、Web上公開され誰でも無料利用が可能なオープンアクセス誌が注目されている。オープンアクセス誌は1論文につき20万円からの投稿料と広告費によって電子ジャーナルの発行を継続して維持していくというものである。そこには、科学研究費の助成を受けた研究は、無料で一般市民に公開すべきであるという思想もその誕生の要因の一つにある<sup>4)</sup>。この発行形態が成功すると従来の大手出版社が中心に独占してきた学術出版はパラダイム変換をおこすものと思われ注目と期待

がよせられている。また、購入価格が高騰する電子ジャーナルの改善策として、もう一つ論文単位での個別売り、いわゆる一部売りサービスも最近登場してきている<sup>5)</sup>。今後個人購読での利用が増すものと思われる。

### III. 学術情報の発信

学術情報の電子化は、従来からの図書館のイメージを一新させている。医学図書館は利用者が情報を入手するために来館する図書館から非来館図書館へと変貌してきている。実際に入館者数は減少している。今日、研究者にとって自宅からインターネットを通じて情報の閲覧と入手が可能な環境が整備された。そこで、医学図書館は利用者からWEBを通じて機関内での所蔵情報および生産された学術情報の発信が求められてきている。学術情報の発信は、実際に大学間で実施状況の進展に違いがある。現在国立大学図書館は文部科学省の後援のもと学術情報の発信に積極的である。医学図書館から発信する学術情報源としては、電子ジャーナル、所属研究者の学術雑誌掲載論文、機関内所蔵の貴重書、科学研究費補助金成果報告書、紀要論文、学位論文、学会発表抄録、学会発表スライド、電子教材、公開講座資料などさまざまな電子コンテンツが挙げられる。これらの学術情報資源は医学図書館から効率よく提供する必要がある。NII（国立情報学研究所）は学術情報資源を連携させた学術情報の一元的な発信窓口（ポータル機能）を整備するため、「NII学術コンテンツ・ポータル（GeNii）」の構築を開始している<sup>6)</sup>。今後、学術情報発信機能を強化するためには、組織関係部局との連携、NIIとの協力体制の維持、電子ジャーナルの体系的な収集、発信する学術情報の充実、著作権のクリア、効率よく発信するために情報にメタデータ（データに関する情報）を付与し統一した

ルールの必要性などが求められる。情報が洪水のように氾濫している現在、将来的には利用者個人々の要求に適した情報発信サービスが必要になるであろう。

#### IV. 電子情報の保存

電子ジャーナルの課題でもある電子情報の保存は、将来大きな問題になると考えられる。紙媒体による資料と違い電子資料の保存と維持管理は、現在不透明な部分が多い。そこで、医学図書館は電子ジャーナル（オープン・アクセス誌）をはじめ、電子化した学術情報を保存する役割が求められてくるものと思われる。NIIは、学術機関リポジトリ構築ソフトウェア実装実験プロジェクトを行い電子情報の保存に果たす医学図書館の役割を報告している。将来各機関の電子情報資源がNIIの支援を受け、保存・公開が統合的に可能になるものと思われる<sup>7,8)</sup>。

#### V. 医学図書館と学際領域・関連機関との融合

現在、医学はひとつの学問分野として単独には成立しえない。医学を取り巻く環境は、学際的に大きな広がりを見せている。医学周辺領域は、看護学、スポーツ科学、倫理学、心理学、経営学、社会科学など多岐分野におよんでいる。そのような中で、医学図書館は関連分野の資料の収集をはじめ総合的に関連する学際領域と連携し、利用者に情報を提供しなければならない。総合大学の場合は、組織内の複数の図書館とのネットワークの構築も求められよう。そして、医科大学図書館の場合は関連病院の図書室との連携も重要であり、関連病院職員にも本館職員と同様なサービスの提供が求められる。電子ジャーナルをはじめ学術情報が電子化されWEB上で提供されるようになった現在、組織内情報機関のネットワーク化の整備は必須である。

#### VI. 患者への医療情報の公開：患者への図書サービス

患者の知る権利、インフォームド・コンセント、セカンド・オピニオン、医療情報の公開などの言葉が新聞紙上に多く掲載されている。今日患者自身が自分の治療法を選択するための医療情報へのニーズが高まっている。そこで、近年病院内に入院患者や外来患者を対象にした「患者への図書サービス」をおこなう施設が増加している。患者図書サービスは、医学情報の提供のほかに、患者のクオリティ・オブ・ライフの促進、癒し、読書環境の整備・提供としての役割も担っている。1970年に京都南病院が初めて実施したのをかわきりに、最近では東京女子医科大学など約100施設がサービスを行っている。患者からは、疾病の専門知識と共に簡便な健康情報や闘病記など分かりやすい資料の要求も多いそうである。患者図書サービスは、患者からの要求で今後医学図書館の一つのサービスとして定着する可能性がある<sup>9,10)</sup>。

#### VII. 図書館の開館時間の延長：24時間開館

今日の社会状況は情報の品質を考慮しなければ、インターネットで簡単に情報の検索と入手がおこなえる環境にある。そこで、図書館の役割は従来の資料を整理、保存、提供することから、知的空間としての機能が重要視されてきている。図書館は勉学に対して快適な環境を整備することが必要である。学生数に見合ったゆとりのある座席数、快適な空調・冷暖房、自然に生成される知的静寂、学生同士が切磋琢磨しながら勉学できる雰囲気とその環境整備である。そのような要求の一つに図書館の開館時間の延長が求められている。アメリカの医学図書館では24時間開館が多く、我が国の場合は地方の国立医科大学図書館が実施しているケースが多い。今後、

PBLテュートリアル教育による問題解決能力の育成、総合的・実践的知識の習得、自己学習および生涯学習の場として医学図書館の開放が広く求められていくものと思われる。当面の課題は、24時間開館より休日開館の実施が求められるであろう<sup>11,12)</sup>。

#### VIII. 図書館員のスキルアップ：情報の電子化による情報リテラシー教育

これからの図書館員は、紙媒体の情報資源とネットワーク情報資源の両方をうまく使いこなせる能力が求められるであろう。E-Learningなど自宅からの医学教育、生涯学習への情報リテラシー能力の支援や育成も図書館員の大きな役割としてあげられよう。

Thomson ISI社は引用索引データベースのWeb of Science、Elsevier社は学術情報の引用や索引の大規模なナビゲーションツールScopusを発表し注目されている。また、Googleは2005年学術情報もナビゲートする検索エンジンGoogle Scholarを開発し、一般市民への学術情報の検索が可能になる環境整備が整いつつある。今まで述べてきたように電子情報の利用環境が推進されるなかで、医学図書館員は研究者の電子情報利用のコンサルタント、大学の運用に必要な電子情報の整備と発信などの役割が今後一層求められていくものと思われる。また、EBMの浸透に伴い医学情報の検索やその吟味、診療ガイドライン作成の資料提供などの援助が期待される。アメリカではCML (Clinical Medical Librarian)が医師のカンファレンスに参加し、そこで課題となったテーマに関する資料を後日提供するという役割もうまれている<sup>13~16)</sup>。

#### IX. おわりに

現在のNLMの館長であるドナルド・リンダーバーグは、2005年3月17日号のNew Eng-

land Journal of Medicineに「2015—the future of medical libraries」と題した論評を発表している。そのなかで、彼は医学図書館の空間的役割の重要性を強調している。図書館は学際的なグループ研究やミーティングに適したスペースを提供することが重要となり、患者にとっては病棟や待合室などから離れた静寂なスペースとして図書館を開放することで、図書館の存在意義は一層高まるであろうと述べている。今後電子情報を集積した医学図書館は、遺伝情報、臨床結果、医学文献が相互にリンクされ、より高度な専門情報を利用することが可能になる。そこで、情報収集や主題分析に実績があり、その知識を兼ね備えた図書館員の役割は今後重要になるものと予測している。最後に、現在は医学図書館や図書館員がその存在意義を高め、より有用なサービスを提供するために飛躍する絶好のチャンスであると結んでいる<sup>17)</sup>。

長谷川は現在図書館のおかれている状況は、拡大と縮小であり、拡大は一般市民への図書館開放などの利用対象の拡大、電子図書館やリテラシー支援などの図書館機能の拡大、サービス内容と利用者の多様化であると述べている。縮小には、図書館予算の減少、図書館員の減少を挙げている<sup>18)</sup>。このような近未来の予測もされている。今まで述べてきたように日々進展が著しい図書館関連分野の状況であるが、図書館員とネットワーク管理担当者および上部組織関係者との連帯が今後一層強く求められるものと思われる。これからの医学図書館は、組織の経営者とその関係者の深い理解と支援が得られなければ日々進展する情報社会の波を乗り切れないであろう。

#### 参考文献

- 1) Academic Information in the Academic Health Science Center: Roles for the

- Library in Information Management. J Med Educ 1982 ; 57(10) pt.2. 津田良成訳 : 医科大学における学術情報マネージメント. 東京 : 慶應義塾大学医学情報センター ; 1987.
- 2) Association of Academic Health Science Library Directors and the Medical Library Association: Challenge to Action: Planning and Evaluation Guidelines for Academic Health Science Libraries. 1987. 行動への挑戦 : 新しい医学図書館活動のためのガイドライン. 東京 : 日本医学図書館協会 ; 1991.
- 3) 加藤信哉 : 総論 : 電子ジャーナルの現状. 情報の科学と技術 2005 ; 55 (6) : 242-7.
- 4) 時実象一 : オープンアクセスの動向. 情報管理 2004 ; 47 (9) : 616-24.
- 5) 原田英二、渡辺怜子、児嶋紀子他 : 電子ジャーナル一部売りの動向. 情報管理 2003 ; 45(11) : 770-80.
- 6) 文部科学省研究振興局情報課 : 学術情報発信に向けた大学図書館機能の改善について (報告書) 2003.
- 7) 図書館高度情報化特別委員会ワーキンググループ : 電子図書館の新たな潮流情報発信者と利用者を結ぶ付加価値インターフェース (平成 15 年 5 月). <http://wwwsoc.nii.ac.jp/anul/j/publications/reports/74.pdf>
- 8) 国立情報学研究所 : 学術機関リポジトリ構築ソフトウェア実装実験プロジェクト報告書 2005.
- 9) 特集「患者図書サービス」. 医学図書館 2004 ; 51 (4) : 316-56.
- 10) 奈良岡 功 : 総説 患者への医学情報の提供. 医学図書館 2004 ; 51 (4) : 317-29.
- 11) 中村昌弘 : 24 時間開館. 医学図書館 2001 ; 48 (4) : 344-9.
- 12) 石井保志 : 図書館アメニティーの視点 : 求められる接客姿勢と館内環境の配慮. 図書館雑誌. 1999 ; 93 (5) : 374-5.
- 13) 特集「スキルアップ・レベルアップ」. 医学図書館 2001 ; 48 (1) : 14-87.
- 14) Corral S: Rethinking professional competence for the networked environment. ネットワーク環境下における専門的能力 (Professional competence) を再考する. In Oldroyd, Margaret (ed.) Developing academic library staff for future success. Facet Publishing ; 2004. p.15-39.
- 15) 中嶋 宏 監修 : EBM のための情報戦略. 東京 : 中外医学社 ; 2000.
- 16) B. L. ホーキンス, P. バッティン編 : デジタル時代の大学と図書館 ; 21 世紀における学術情報資源マネジメント. 東京 : 玉川大学出版部 ; 2002.
- 17) Lindberg DA, Humphreys BL : 2015-the future of medical libraries. N Engl J Med 2005 ; 352(11) : 1067-70. <http://content.nejm.org/cgi/content/extract/352/11/1067>
- 18) 長谷川豊祐 : 新たな図書館像. 情報管理 2004 ; 46 (12) : 835-7.